



くみはまだより



令和2年5月25日発行：久美浜市民局 <5月号>

「二区地区活性化協議会」を再編

“久美浜二区振興会”がスタート 4月20日



結(ゆい)の精神で、住みよい地域に

久美浜二区振興会理事長
二区区長会長 松田正則



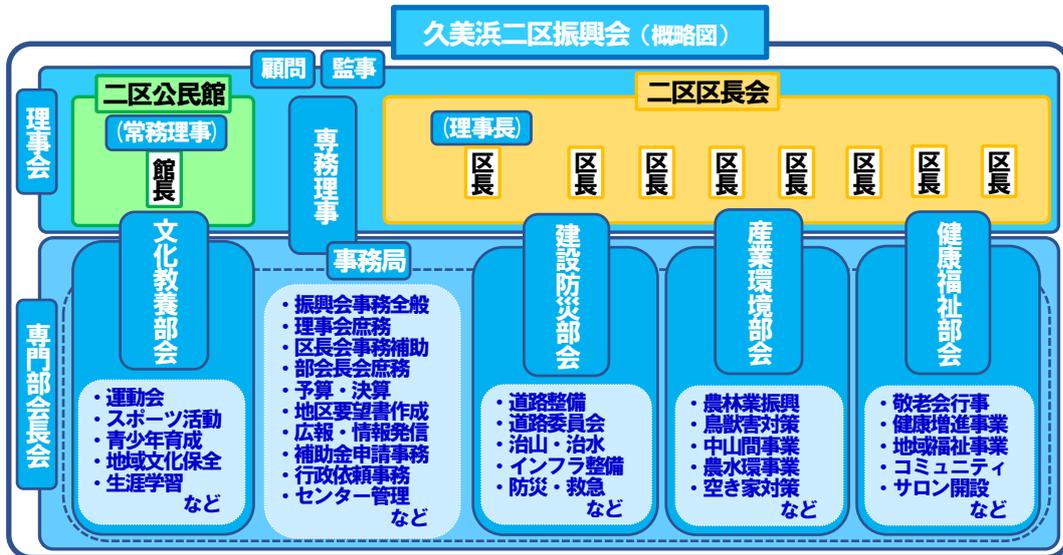
去る4月20日に、久美浜町二区(8集落)の新たな自治組織として再編された「久美浜二区振興会」が発足しました。
平成29年度から検討が重ねられてきたもので、これまでの「二区地区活性化協議会」と「二区公民館」「二区区長会」が一体となった新組織が誕生しました。
当地区でも、少子高齢化と地域人口の減少が進み、

婦人会や子供会、自治会など地域団体の役員の手不足や活動の停滞、さらには団体の解散などが顕著となり、地域の大きな課題となっていました。これまでも、二区地区活性化協議会や二区公民館、二区区長会が中心になって、それらの課題解決に向けた懸命な取り組みが重ねられてきました。相次ぐ自然災害等の発生に伴う行政対応事務の増加や耕作放棄地対策などに対応する区長さんなどの用務も複雑多様化してきました。
そのような中で、「区長の負担を軽減しつつ、より機能的で持続性のある地区全体の自治組織の再編」が求められてきたのです。

市(行政)でも「新たな地域コミュニティ」の必要性が提案されてきましたが、当地区としては、平成30年度の「二区区長会体制強化委員会」の中間答申(同年1月)をべ

区長会と公民館が一体で地域課題に対応

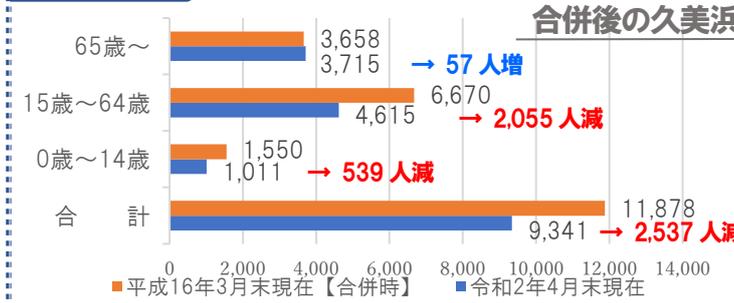
専務理事や専門部会を設置し、区長負担を軽減



スに、今回の再編がスタートしたものです。
これを機に、山積する諸課題の解決に向けて、各種の地域活動を通じて、この地区の住民や団体が協力しながら「明るく住みよい、久美浜二区の地域づくり」に

努めていく所存です。「ゆっくりといい」の精神により、持続可能な自治組織を創り上げていきたいと思えます。皆様のご支援とご協力をよろしくお願いたします。

今月のDATA



合併後の久美浜町の人口推移

	平成16年3月末現在【合併時】	平成31年4月末現在【1年前】	令和2年4月末現在【今年】
0歳～14歳	1,550人	1,008人	1,011人
15歳～64歳	6,670人	4,747人	4,615人
65歳～	3,658人	3,711人	3,715人
合計	11,878人	9,466人	9,341人
高齢化率	30.80%	39.20%	39.77%

<<裏面もご覧ください。>>

「漁業×観光」ビジネスの創業に挑戦

HIROSHI YOSHIDA

【PROFILE】

兵庫県神戸市出身。昭和59年11月生まれ。35歳。平成26年10月から愛媛県上島町及び三重県熊野市で地域おこし協力隊員を経験し、昨年7月から京丹後市の同隊員に着任。久美浜町蒲井在住（久美浜市民局勤務）。

カキやクロクチの販路拡大を模索

京丹後市地域おこし協力隊
吉田 浩士

きっかけは隠岐の島での体験

「地域おこし協力隊」の吉田です。昨年7月から、蒲井・旭地区で、「観光漁業」というテーマで活動しています。

前職で、隠岐の島（島根県）の海士町（あまちょう）で生産された「CAS冷凍（※）の岩牡蠣（イワガキ）」を取り扱ったことがきっかけで、漁業に興味を持つようになりました。その後、熊野市（三重県）や大阪市などの生産地や流通・小売の現場で経験を積んできました。

具体的な活動内容は、地元の地域活性化団体である「蒲井・旭電源問題及び活性化対策協議会（古橋五郎会長）」が企画運営をしている「シーカヤックツアー」や「かき小屋」の業務に従事しています。カヤックのインストラクターやカキの養殖棚での水揚げ作業なども実際に体験しています。

蒲井は「非日常」の特別な場所

この2つの事業は、今年で4年目を迎え、毎年、「前年を上回る来訪客数」を記録し、実績を伸ばしてきました。

この地区は、久美浜町の西端にあり、決して、便利な地域とは言えません。しかし、地域の人にとっては幼い

ころから慣れ親しんだ海や里山の「日常」は、都会の人にとっては「非日常」という“特別な場所”です。実際に、シーカヤックツアーに訪れる人の8割強が京阪神の都市部からのお客さんです。

冬になると、風蘭の館で「かき小屋」が始まります。今シーズンの営業は、新型コロナウイルスによる深刻な影響が出始めた3月までは、とても好調でした。

この集客力の源泉は、どこにあるか。「殻付きカキの美味しさ」はもとより、漁港色の演出などがお客を惹きつけていますが、その根底にあるものは、厳冬の中で養殖に携わる生産者の努力です。

時間や人手が不足の兼業養殖

久美浜湾でのカキの生産は、民宿などとの兼業で営んでいる方が多く（養殖漁業者は、約100軒）、カキ養殖に割ける時間や労力は、限られています。漁業者からは、「美味しく大きなカキが育っても、販路拡大や加工品開発への時間や人材が足りない」といった悩みも聞きます。

また、カキ養殖の副産物である「クロクチ（ムール貝）」も、市場にはあまり出回らないため、廃棄処分されることもあります。

こういった、なかなか手が届きにくい部分を、どうやって克服し、また、より付加価値の高いものに活用していくのが課題です。

カキ養殖の研究グループも活動

近年、新たな養殖技術の研究などを始めようとしている若い生産者グループ（久美浜湾養殖技術研究会）が発足し、活動しています。

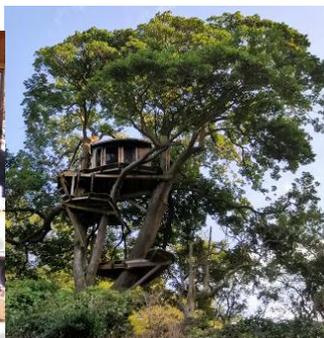
今後とも、蒲井・旭の活性化協議会はもとより、久美浜まるごと実践会議の構成員など、観光や地場産業など地域の経済活動に携わる多くの皆様のご理解やご指導をいただきながら、新ビジネス「水産業×観光サービス業」の創業に挑戦していきたいと思っています。

※【CAS（キャス）冷凍】

Cells Alive System（細胞が生きているシステム）の略。細胞を壊さないまま冷凍できる保存技術。



▲今シーズンは、新型コロナウイルス感染症の影響があったものの、3月までの入込みは過去最高を記録



▲年々増加する「シーカヤックツアー」



▲蒲井海岸のツリーハウス
ウズ
▲人気の「食べ放題の殻付きカキ」